

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

なぜ公共空間の生態学なのか
：「潜在的なもの」に目を凝らし、耳を澄ますために
＜共同研究：カネとチカラの民族誌：
公共性の生態学にむけて＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内藤, 直樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009490

なぜ公共空間の生態学なのか

—「潜在的なもの」に目を凝らし、耳を澄ますために

文・写真 内藤 直樹

公共空間の「生態学」—カネとチカラの民族誌

本研究の目的は、成長と予測可能性の神話が崩壊した不安定な世界における、しばしば合意形成や相互理解によらない人間／非人間による「寄せ集まり (assemblage)」(チン 2019) をある種の公共空間として捉え、それがさまざまな文脈において創発する機序を考察することにある。

そのために、本研究では人間／非人間による生存上の必要の充足に関わる行為が、結果的に諸アクターとの相互作用の連鎖を創発する事例に関する民族誌を比較検討する。これらの検討を通じて、先進国において「福祉国家の危機」、途上国において「崩壊国家の危機」と総称されるようなグローバルな政治経済的状況における公共性をめぐる諸問題に対する人類学的な応答の方途を構想する。それは、社会が成立する保証が無い状況から、社会がいかに立ち上がるかを考察することでもある。換言すれば、それは市民社会やその規範的価値の存在を前提視しえない状況における、①それぞれの生存を追求しようとする多様な主体による利己的な行為(チカラ)に焦点をあて、②物質やエネルギーの移動をともなう相互行為としての経済(カネ)に注目し、③それが特定の価値や倫理を帯びた場所やネットワークを産出する事態を社会的なものの創発として捉え、その機序を検討することを通じて公共空間の生態学を構想することにはほかならない。

公共空間の生態学は、近年の気候変動や科学技術の進展に対する人文・社会科学領域の応答である人新世やポストヒューマニズムといった、人間性をめぐる新たな議論に関連している。人工知能や医療技術の開発あるいは気候変動や環境汚染といった科学技術の進展にともなう社会問題の多くは、人間の主体性と予測可能性という信念に基づく近代以降の人間活動の累積が、逆に人間／モノの境界のゆらぎや予測不可能性に帰結することを暴露した。こうした事態は、主体としての人間存在だけが特権的に客体としての世界を操作可能であるという信念に根源的な懐疑をもたらしている。

非人間中心主義的転回に対する人類学的な応答として、人間と関わりがある生物からの働きかけに着目したマルチスピーシーズ民族誌の試みが存在する。だが、それらは人間から見た動物表象を「動物自身の意志」として提示しているにすぎず、むしろ自然界の徹底的な文化化(人間化)であるという批判もある(片岡 2020)。それに対して、成長と予測可

能性の神話が崩壊した不安定な世界における雑多な人間と非人間の「寄せ集まり」による「意図しえぬ設計」に基づく「世界制作の活動」(チン 2019: 228)として人間—非人間関係を描く試みも存在する。

本共同研究が構想する公共空間の生態学は、非人間中心主義的転回に対する人類学や地域研究からの応答を目指している。それは非人間の性急な人間化のかわりに、人間と非人間による意図的／非意図的な相互作用の結果を、ある種の公共空間の創発として見なした上で、そのダイナミクスを理解することを意図している。

なぜ生態学なのか

日本生態学会によれば、「『生態学』は、生物と環境、または生物同士の相互作用を理解しようとする学問です。生物はさまざまな形で周囲の環境と関わりをもつと同時に、多数の生物種とも相互作用しながら生活しています。何百万とも何千万とも推定される生物種の『生活の法則』を解明することが生態学の目的です」という(日本生態学会 HP)。生物学の1分野としての生態学の「ものの見方」の核心は、さまざまな生物／非生物による相互作用とその意味を明らかにしていくことにあるだろう。

ここで文化人類学と生物学の初期の結びつきを思い出してみよう。近代市民社会黎明期の西欧におけるアフリカ人奴隷取引の正当性を補強するために、「適者生存」や「優勝劣敗」といった生物学と経済学が融合した論理が用いられた。それに関連して、西欧による人類社会の序列化と支配を正当化する道具として古典的文化進化論が用いられたことは人類学者のトラウマである。それゆえ人類学者には、資本の無限拡大を是とするような経済学的論理やそれを生物学にあてはめたある種の社会生物学的な論理を人間のさまざまな営為にあてはめることに対する強い警戒心がある。

だが、「資本主義に破壊された場における生の可能性 (possibility of the life in the capitalist ruins)」についての文化人類学的な考察をおこなったアナ・チンは、「生態学の進展により、種間の相互行為と攪乱の歴史を取り入れた、まったく異なる発想が可能となった。今日のようにあまり多くを期待できない時代において、攪乱に基づいた生態学を模索してみるのもよい。そうした環境下では、多くの生物たちが、調和も征服もせず、ともに生活している」(チン



難民キャンプの市場。難民は配給食以外の食品やその他の生活用品を入手する必要がある。他方でホストは難民が配給される主食を安価で購入したいと考えている。両者の必要を満たすために、難民キャンプには市場が開設されている。これは、庇護国政府や国際機関になかば公認されている非公式的な市場である（2017年8月、ニャルグス難民キャンプ、タンザニア）。

2019: 9) という。これは経済学の生態学／生態学の経済学への還元とはまったく異なる。そしてチンは、資本主義的な営為によって破壊された環境で生きようとする人びとにとっては、さまざまな人間／非人間との「予期せぬ出会い」に気付く術こそが抛りどころとなると主張している。そうした術をもつ人びとの、国家や権威に頼らずに資本主義社会の周縁で生きる様にこそ、資本主義による破壊＝攪乱後の生へのかすかな希望が見出すことができるという。ここでの調和や征服とは異なる関係性は、アクター間の合意や理解を前提としない。本研究であえて生態学という言葉を用いたのは、人間を含む諸アクター間の「合意」や「理解」を前提としない相互作用に注目するからである。このように諸アクターがそれぞれの歴史と欲望のままにおこなう行為の寄せ集まりが、結果的に各々が「よく生きること (well-being)」を可能にする場を生み出すことがある。チンは、そうした場を「フリーダム」(チン 2019) と名付けている。公共空間の生態学においては、フリーダムのある種の公共空間と捉え、それがさまざまな文脈において創発する機序を比較検討する。

新たな公共空間の可能性にむけて

公共性概念を一般化することは困難だが、ここでは機能主義社会学的な立場から新たな公共空間の可能性について論じた三上剛史 (1998) にならって「『私』に立脚しつつも、『私』を越えた社会的連帯を可能にする契機」とする。そして「公共空間」とは、それが実現される空間とする。

近代以降の私たちの生活領域は、何らかの機能システム（経済・行政・教育・医療・司法など）と関係づけられるようになっていく。もはや、それらとまったく関係ない領域は地球上に存在しない。その一方で、近年のグローバル化にともなう「市場の失敗」や「国家の失敗」などに代表される機能システムの予期せぬ逆機能が私たちの生活に負の影響をもたらすリスクも高まっている。しかも、機能システムの逆機能への対処に関して、かつての理想的な市民的主体による合意と連帯による秩序の（再）形成という公共性の物語は混乱をきたしつつある。さらに近年の情報化と差異化の進行は、ステークホルダーの増殖・拡散と合意の困難をもたらしている。

こうした状況に対して三上 (1998) は、「機能的連帯」

内藤 直樹 (ないとう なおき)

徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学学域准教授。専門は生態人類学、地域研究。編著書に『社会的包摂／排除の人類学—開発・難民・福祉』（昭和堂 2014年）、論文に「ケアの空間、かりそめの場所—東アフリカの難民キャンプにおける市場の形成」森明子編『ケアが生まれる場—他者とともに生きる社会のために』（ナカニシヤ出版 2019年）などがある。

という、自らの生活に降りかかるリスクの回避を目的とした部分的・一時的連帯を新たな公共領域の萌芽としている。そこに合意はあるが、それは部分的・一時的なものでよく、集合的アイデンティティとして総合される必要は無い。各アクターが「やりたい時」に「やりたい事」をしているだけである。このように生活の便宜に則して人びとが繰り出すさまざまな行為は、それが行政サービスのような機能システムから独立しているからこそ、システムが生み出すリスクに対処可能なのだという。

本共同研究では、このような現代社会における複合的な機能システムがもたらすリスクに対して再帰的に構成されている「システム外システム」を公共空間に含めて理解する。それは、人びとが生きるためにおこなう「アンダーグラウンド」な行為も含む。そうすることで、機能システムが生み出すリスクにさらされている人びとが、自らのあるべき生の実現にむけた営みの中でほかの人間／非人間と「出会い」、生きる術に学びたい。

そうした「出会い」は、機能システムの逆機能のなかで生じる一瞬の絡まりあいである。広大な面積に根を張っているが、まだ土中に潜んでいるために不可視の菌糸のような出会いの可能性で、世界は満ちている。だが、私たちは土を突き破ってキノコが生えたとき、ようやくそれに気付くことができる。この世界は自らのあるべき生の実現にむけた「潜在的なもの」で埋め尽くされているのかもしれない。公共空間の生態学とは、そうした人間／非人間による相互作用のネットワークが創発するあり様を探求することにある。そのために地球上のさまざまな時空間における私たちの共同的な生に関わる潜在的なものに目を凝らし、耳を澄ましてみたい。

参考文献

- 片岡樹 2020「すべてははじめからわかっていた—東南アジア大陸部山地民ラフの呪術と動物」川田牧人・白川千尋・飯田卓編『現代世界の呪術—文化人類学的探究』横浜：春風社。
- チン、A. 2019『マツタケ—不確定な時代を生きる術』赤嶺淳訳、東京：みすず書房。(Tsing, A. 2015 *The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*, Princeton University Press.)
- 日本生態学会HP
https://www.esj.ne.jp/esj/what_ecol/index.html (2019年11月28日閲覧)
- 三上剛史 1998「新たな公共空間」『社会学評論』48(4): 453-473。